

米国におけるラグビー衰退の経緯を紐解く： ラグビーからアメリカンフットボールへの転換期を中心に

The Decline of Rugby in the United States The Transition from Rugby to American Football

大西 好宣¹⁾

ONISHI Yoshinobu

Abstract

The first rugby team in the U.S. was formed at Harvard University in 1872, and its first match was with Canada's McGill University in May 1874. After that, rugby became very popular not only on the East Coast but also all over the U.S., particularly in the 1890s. However, with the rise of American football, rugby in the U.S. started to decline as early as the beginning of the 20th century, but we do not know much about what was behind this decline. This paper, therefore, focuses on the background of how rugby in the U.S. was replaced by American football. It also explains a similar situation in Japan in the late 1990s where rugby lost fans to a professional soccer league. The paper also stresses the importance of the U.S. as a future market for rugby fans in the world, though they are not necessarily familiar with U.S. rugby and its history.

キーワード: アメリカ合衆国、ラグビー史、大学ラグビー、アメリカンフットボール、クリケット
Key words: The United States of America, Rugby history, College rugby, American football, Cricket

1、はじめに

フットボールと聞いて、我々が最初に思い浮かべるスポーツは、おそらくサッカーとラグビー、そしてアメリカンフットボールという、世界でも代表的な三つの競技であろう。このうち、サッカーとラグビーはいずれも英国発祥のスポーツであり、それぞれが成立した過程について、今日、全てではないにしてもある程度のことわかっている。

他方、アメリカンフットボールはその名の通り米国で成立し、当該三競技の中では最も新しい競技だということ以外、わが国ではその詳ら

かな成立の経緯については残念ながら殆んど知られていない。それには、国別の競技人口など、国際的普及度といった点で、同競技がサッカーやラグビーに比べ見劣りするという事実も、もしかすると関係しているのかもしれない。

ただ、同国におけるアメリカンフットボールの勃興は、おそらくラグビーの衰退と軌を一にしているであろうことは合理的な想像がつく。そもそも、現在のラグビー強豪国であるオーストラリアやニュージーランドといった国々と同じく、米国も英国の旧植民地である。ラグビーという競技が米国に伝播したことは間違いなからうが、さて米国人はいつどのような理由でラ

1) 千葉大学

グビーを諦め、アメリカンフットボールを選択したのだろうか。

2、本稿の目的と方法論

本稿では、米国におけるアメリカンフットボールがいつどのような理由で人気を獲得し始めたのか、15人制ラグビー（いわゆるユニオン）の衰退の歴史的経緯と関連づけながら、文献調査を通じた様々な情報を統合することによって明らかにしたい。

もちろん、まことに小さな、そして拙い試みではあるものの、わが国のラグビー人気とその行く末を考える上で何らかの共通点や参考情報が見出せるかもしれない。また、わが国において米国のラグビーに関する情報が極めて少ない現状では、こうした試みにも何らかの意味や価値があるものと信ずる。

3、先行研究に代えて：記録や資料から米国の現状及び歴史を概観する

(1) 米国ラグビー草創期：その1

本題である米国ラグビーの衰退について語る前に、順序としてはその草創期についてまず触れねばなるまい。スミス（2001）ⁱによれば、米国初のラグビーチームは19世紀後半、ハーバード大学で誕生したという。同大ラグビー部のホームページには、1872年創立と明確な年代が書かれている。

1874年5月、同大は隣国カナダの名門マクギル大学と戦い、これが記念すべき米国初のラグビー試合であるとされる。この点、わが国におけるラグビー伝来の経緯とも共通点があり興味深い。

何故なら、ハーバードは1636年に設立された米国最古の大学であり、そうした大学に初めてラグビーが伝わったことは、わが国でやはり事実上最古ⁱⁱとされる大学の慶応義塾に日本で初めてラグビーが伝わったことを自然に想起させるからである。さらに、両者共に外国人チームがその最初の試合相手だったことⁱⁱⁱ、またその理由がいずれも国内に相応しい相手チームが当

時存在しなかったからというのも、国内初のチームであったがゆえの必然とも言える共通点である。

(2) ラグビー前史としての原始フットボール

但し、米国の事情が日本のそれと大きく異なっていた点がひとつある。それは、米国の大学にはラグビーを受容する以前の、いわば前史とも言うべき混乱、懊悩、革新の経験があったということである。そしてそこでも、主役はハーバード大学であった。

先のスミスによれば、「1850年代にはすでにほとんどの大学で学生たちはフットボールを楽しんでいた」^{iv}という。当時のフットボールをスミスはサッカー型フットボールと呼ぶが、確かに「ボールを持って走ったりボールを投げたりすることはできなかった」という点では今で言うサッカーの性格を有していても、「ボールを掌や拳で打つことは許されていた」という点では、現代のラグビーにも通じるような性格を併せ持っていたと思われる^v。いわば、サッカーやラグビーに分化する以前の、肉弾戦を中心とした原始フットボールというイメージであろう。

その証拠に、当時ハーバードで行われていた学年対抗フットボールの試合について、スミスは学生による以下の壮絶な文章を紹介している^{vi}。

大声で怒鳴り、叫び、鼻血を拭う、
すべての色が、純白の百合色から深紅のバラ色へと変わるなか、
シャツは裂かれ、縫目は引きちぎられる、
平和が侵され、残されるのはズボンの切れ端だけ

試合が行われる秋学期の初日は、当時学生の間で「血の月曜日」と呼ばれたという。もし単純なサッカーのルールであれば、ここまでの混沌は生じなかったのではあるまいか。いずれにしても、スポーツの名を借りたこうした激しい肉弾戦は、当然ながら大学当局によって間もなく一切禁止の通達が出されることになる。

そのような中、ハーバード大では独自の規則策定によるフットボールの実施・継続が模索さ

れた。その結果、「すべての選手がボールをキャッチしたり、拾い上げること」及び「ボールを手にもって走ること」を認め^{vii}、よりラグビーのルールに近づいたのである。イエール大やプリンストン大といった、当時の有力校が軒並みそれまでのルールにあくまで固執したのに比べれば、ハーバード大のこうした動きはある意味開明的と言えなくもない。

(3) 米国ラグビー草創期：その2

さて、スミスがボストン型と呼ぶ新たな、そして独自のフットボール形式を採用したハーバードは、イエールやプリンストンといった国内有力大学との対抗戦をボイコットし、本章冒頭で紹介したカナダのマクギル大学との試合に臨む。マクギル大がハーバード大を訪問する形で実現された両校の対戦は、計2試合が組まれた^{viii}。

1 試合目はハーバード大のルール、すなわちボストン型フットボールで、翌日の2 試合目はマクギル大学のルール、つまり当時のラグビールールで争われた。ハーバード大ラグビー部 HP や Wikipedia など、多くの資料は 1874 年 5 月 14 日の1 試合目を米国初のラグビー試合とするが、正確には即席のゴールポストまで建てられた翌日の2 試合目が本来のラグビーと呼ぶに相応しい試合だったのではあるまいか。

ハーバードのルールで戦った1 試合目は予想通りハーバードが勝利し、ラグビーのルールで戦った2 試合目は両チーム引き分けとなった。それでも、ハーバード大の面々はマクギル大がもたらしたラグビーのルールを大変気に入り^{ix}、以後はこのルールの採用に積極的になる。その結果、盟友イエール大とプリンストン大を説得することに成功し、ニューヨークのコロンビア大も含め結成した新たなリーグ戦が、今日のアイビーリーグの礎石となるのである。

(4) 米国ラグビー隆盛期

スミスによれば、その後のラグビーの隆盛を決定づけたのは感謝祭ゲームの発展であったという。感謝祭とは毎年11月の第4木曜にあたる休日、前年の上位2チームによるフットボー

ルの言わば決勝戦が、19世紀の後半から毎年この日に開催されることになったのである。

開催地こそニュージャージー、ニューヨーク、そして最後はより管理のしやすい各大学自前のスタジアムと変遷したものの、全米選手権としての重みゆえに「19世紀の大学スポーツのなかで、この感謝祭ゲームほど傑出した呼び物となったものは他にはなかった」という^x。こうして、1874年に「マクギル大学によって初めてハーバード大学に紹介されたラグビーは、1890年代にはアメリカで最も花形の大学スポーツになっていった」のである^{xi}。

写真1は、現在もカリフォルニア大学バークレー校の校門近くにあるラグビー選手の像である。2016年度の全米チャンピオンである同校は1890年代も地域の強豪として知られ、碑文には1898年及び1899年における同校の活躍を讃えるという但し書きがある。この時期既にラグビーが東海岸だけではなく、サンフランシスコなど西海岸にも広まっていたことを示す貴重な証拠と言えよう。

写真1 バークレー校のラグビー像^{xii}



4、主役の交代：ラグビーからアメリカンフットボールへ

前章では、19世紀後半の米国において、フットボールがサッカー型からラグビーのルールを基調としたそれへと移り変わる様と、そうした変化の中心的な役割を担ったハーバード大学のイニシアチブについて見て来た。スミスが「短命に終わったサッカー型フットボール」と記す通り^{xiii}、ラグビーの勃興はサッカーの衰退でもあったということだろう。

その後、ラグビーとアメリカンフットボールにも同じことが起きることを我々は知っている。本章ではその経緯について見て行こう。まずは新たなスポーツの誕生についてである。

(1) アメリカンフットボールの誕生：ラグビーへの三つの不満

アメリカンフットボールの誕生に際し、重要な役割を果たしたのはハーバードのライバル、イエール大学である。より正確に言えば、同大の卒業生ウォルター・キャンプというカリスマ的な一個人であった。

今日、キャンプはアメリカンフットボールの父として全米を中心に広く知られるが、もともとはラグビー選手である。前章の最後に触れた感謝祭ゲームの歴史的な第1回選手権大会において、プリンストン大学とイエール大学が対戦した際、キャンプはイエール側の1年生ハーフバックとして出場していた^{xiv}。

キャンプは大学卒業後も継続的にフットボールやその試合運営に深く関わった。彼が現在のアメリカンフットボールの骨格を考案したのは、上の試合からわずか約10年後のことであるという^{xv}。スミス、川口(1977)^{xvi}、PFRA(年代不明)^{xvii}などの資料を総合すれば、米国でアメリカンフットボールが生まれたのは、英国生まれのラグビーに対する次の三つの大きな不満であったようだ。

①スクラムの非合理性

川口によれば、当時のラグビーのルールではスクラム内にあるボールを足で外に掻き出す、

いわゆるヒールアウトが許されていなかったらしい。それゆえ、ボールがスクラムから出るのに時間がかかり、ゲームはその間停滞することになる。こうした傾向を嫌ったキャンプは、単にスナップのみでボールを出す方法を思いついたのだという。

因みに、スクラム(scrum)とは正式な用語であるスクラミッジ(scrummage)を、後年ラグビー側の関係者が短縮して一般化したものである^{xviii}。アメリカンフットボールは今でもスクラミッジと呼ぶのはご承知の通りである。

②タックル防御の曖昧さ

ラグビーでは、ボールを持つ攻撃側が守備側のタックルを受ける場合、攻撃側の味方選手がそれを防ぐ(妨害する)方法はない。そもそも、ラグビーのルールではボールの前にいる味方選手はオフサイドの位置にあるとされる。それでも実際には、攻撃側のボールを持たない選手が、ボールキャリアを助けるために守備側タックラーの走路妨害をすることが度々あったようだ。

スミスによれば、当時のラグビーの規則にはそうした行為がどこまで許容されるか特に明記されておらず、米国人にはこうした英国紳士向けの曖昧さに不満が溜まっていたという^{xix}。こうした曖昧さを米国人が許せなかったという点については、川口も同じ見解を示している^{xx}。

そして、キャンプが出した結論は、このような妨害行為を新たなルールでは範囲を定めて正式に認めてしまおうというものであった。これを契機として、敵チームのタックルを味方選手が集団で防御/妨害するという、スミスが集団型戦術と呼ぶ新しい戦い方が生まれる。このことが後に全米を揺るがす事態を招来するが、そのことについては後述する。

③攻守交代、攻撃権の硬直性

ラグビーでもサッカーでも、ボールを保持している限りはそのチームに永遠に攻撃権が与えられる。そのため、現代においても実力の拮抗するチーム同士の対戦では、敵にボールを渡すまいと味方同士で意味のないパス回しを長く続けるなど、保守的な試合運びになりがちである。

実際、米国でラグビーが人気を集めていた1880年、1881年の感謝祭ゲームでは、イエール大学とプリンストン大学の対戦が続き、2度とも両者無得点の引き分けという結果に終わったことで、両校の消極的な試合運びが問題となった^{xxi}。

それを見たキャンプが新たに導入したのが、攻撃権の強制的な移動、すなわちダウンという概念である。これは野球のアウトに相当するもので、問題となった感謝祭ゲーム翌年の1882年には早くもこの考えを取り入れたヤード・アンド・ダウン規則が導入され^{xxii}、チーム力の差によっては、ややもすれば試合が消極的になり停滞するという従来のラグビーの欠点が部分的に解消されることになった。

(2) アメリカンフットボールはラグビーから生まれた？

1882年のルール改正から、今のように前方へのパスがルールで認められるようになるにはもう少し時間を要するものの、ラグビーのルールからアメリカンフットボールのそれへという、上で見た一連の変化を紐解けば、英国生まれのスポーツが米国でどのように変化し、受容されたかという点については大方理解出来よう。

また、日本で流布している、ラグビーはサッカーから生まれたという誤解は、多くの識者が指摘するように、footballをサッカーと翻訳したことによる単純な誤りに過ぎないが^{xxiii}、アメリカンフットボールはラグビーから生まれたという一般的な理解は、上のような事実を理解する限り正しいようである。実際、1970年頃までのわが国では、アメリカンフットボールのことをアメリカンラグビー、または短縮系のアメラグと呼称していた。例えば、1965年公開の映画『エレキの若大将』では、加山雄三扮する主人公の青年が大学アメラグ部のキャプテンとして登場する。当時は、アメリカ生まれのラグビーという意味であったのだろう。

(3) ラグビーは何故アメリカンフットボールに取って代わられたか：三つの仮説

さて、本稿の主題は、米国におけるアメリカ

ンフットボールがラグビーに代わっていつどのような理由で人気を獲得し始めたのかを探ることであった。よって、この項では主たる三つの仮説を紹介したい。

①文化の違い仮説

これまで見て来た流れがまずはひとつの回答である。すなわち、19世紀末から20世紀冒頭にかけて、米国人自身が英国流のラグビーを国内向けにアレンジした。新たなスポーツはアメリカンフットボールと呼ばれ、曖昧さを好まない気質を持つ多くの米国人が徐々にそれを受け入れたというものである。こうした、言わば「文化の違い仮説」とでも呼ぶべき理解が今では米国内外で一般的であり、実際、これまでその多くの説を引用したスミスもそのような立場だと思われる。

けれども、これには幾つかの反論が可能であるように思う。例えば、19世紀末から20世紀冒頭にかけて吹いた、アメリカンフットボールへの逆風をどのように理解するかという問題である。本章(1)②で指摘した、ボールを持っていない選手が束になってタックラーを妨害出来るというルール変更、すなわちアメリカンフットボールにおける集団型戦術の開始は、競技自体の激しさや暴力性を惹起し、実際に深刻なレベルの多くの怪我人を生んだ。

こうした流れから、アメリカンフットボールは危険なスポーツだという認識が米国内で広まり、この競技に対する社会的な抵抗が生まれたのである。スミスはこのことを「野蛮さと1894年の危機」と呼ぶが^{xxiv}、もとより「野蛮さに対する非難の高まり」はこの1894年だけに限った傾向ではない。

こうした激しい逆風にも関わらず、事実として、米国人は最終的にラグビーよりアメリカンフットボールを選択したのである。その理由について、「文化の違い仮説」単独では必ずしも十分な説明になっていない。

②プロリーグ誕生による拡大仮説

「文化の違い仮説」を補強するもうひとつの仮説として、アメリカンフットボールは、大学

に加えて、当時のラグビーにはなかったプロリーグが早々と誕生し、それが逆風を吹き飛ばす大きな推進力として働いたから、というものがある。

実際、1892年にはイェール大出身のウィリアム・ヘップフェルフィンガーが1試合500ドルで米国初のプロフットボール選手となり、1898年には初のプロチームであるカージナルスも誕生している^{xxv}。2008年公開の米映画『かけひきは、恋のはじまり』には、当時より少し後の1920年代に多くの観客を集めたプロフットボールリーグの様子が、未完成ゆえの危険性も含めて生き生きと描かれている。原題のLeatherheadsは当時使用された頭部用防具のことであろう。

しかし、アメリカンフットボールにはラグビーにないプロリーグが誕生したので、それがラグビー人気を奪ったのだという上の仮説に対して、さらに違った反論をすることも実は可能だ。何故なら、ほぼ同じ時期、ラグビーにもそれなりの大きな順風が吹いていたからである。それは、米国代表ラグビーチームの夏季オリンピックへの4度に及ぶ出場^{xxvi}と2度にわたる優勝^{xxvii}である。

そもそも、19世紀末から20世紀冒頭にかけてはまだラグビーとアメリカンフットボールは人気という点で併存していたし、さらに既述のようにラグビーは東海岸からサンフランシスコなどの西海岸へと大きな広がりを見せていた。実際、オリンピックへの出場を果たしたのも、その西海岸を中心としたメンバーだったのである。

③期待はずれによる失望仮説

日本では全く知られていないものの、米国のラグビーファンには割と広く信じられている伝説のような仮説が実はもうひとつある。

1912年、西海岸の大学生を中心とする米国代表チームはオーストラリア代表ワラビーズと米国カリフォルニア州バークレーで対戦し、12対8で惜敗する。翌1913年、米国は必勝を期して当時史上最強と謳われたベストメンバーを編成し、同じ場所で今度はニュージーランド代表オールブラックスと戦った。

しかし、結果は51-3と前年以上の無残な敗戦に終わる。1トライが5点という現在のルールなら、点差はもっと開いていただろう。今では伝説となったこの試合の顛末について、米国のスポーツ専門チャンネルESPNのRichards(2013)^{xxviii}は“The tour that killed American rugby”という刺激的なタイトルをつけて紹介している。そこで引用されている当時の新聞記事が、米国ラグビーファンの失望の大きさを代弁していると思われるので、以下に紹介したい。

カリフォルニアの選手たちは、我々が過去7年間に育てた最強の学生たちだが、相手とのスコアは51対3だった。ここから導かれる唯一の結論は、我々はどのようにラグビーをプレーすべきかをまだまだ学んでいないということだ。ラグビーは依然として外国のスポーツなのである。

(San Francisco Post 紙、訳は筆者)

これが「期待はずれによる失望仮説」の概要である。確かに、史上最強と謳われた米国代表ラグビーチームが、相手がいかに強かったとはいえ、ホームのファンの前で完膚なきまでに叩かれたことの衝撃は想像に難くない。この一戦のせいで、米国のラグビーは死に絶えたというのがRichardsの主張である。ファンの大きな期待はその反動として、取り返しのつかない失望に変わったというわけである。

さて、些か横道に逸れるかもしれないが、オールブラックスに大敗と聞いて、我々日本のラグビーファンがまるで条件反射のように思い出すのは、あの145失点の悪夢である。1995年のラグビーワールドカップにおいて、日本はニュージーランドと戦い、17対145で惨敗した。

この試合が日本におけるラグビー人気の分水嶺となり、ラグビーはそのわずか2年前に始まったサッカーのJリーグにその後すっかり人気を奪われたのだと理解する人は今も多い。例えば読売新聞(2018)^{xxix}は、この試合のスタンドオフとして出場していた広瀬佳司へのインタビュー記事で、オールブラックス戦の大敗を「ラグビー人気の低迷を招いた原因」と書き、広瀬

自身も『ラグビーに憧れる子供の夢を潰してしまふ』と責任を感じた」と述懐している。

確かに、史上最強と謳われた自国のチームが外国チームに惨敗すれば、ファンの熱意や関心は一挙に大きく損なわれるかもしれない。そして、同種の経験を持つ日本のラグビーファンなら、そのことを身に沁みて理解出来る。

ただ、1913年オールブラックス戦の敗戦ひとつで米国のラグビーが息の根を止められたとする上の仮説には、事実を伴う以下の強力な反論が可能である。すなわち、既に述べた後年のオリンピック出場と2度の金メダル獲得である。米国代表ラグビーチームは、1913年オールブラックスとの敗戦に奮起し、その7年後、そしてさらにその4年後と2度も世界一の栄冠を勝ち取ることに、見事に捲土重来を果たしたのである。Richardsの指摘とは逆に、米国のラグビーは決して死に絶えてはいなかった。惜しむらくは、米国が2度目の金メダルを獲得した1924年以降、15人制ラグビーそれ自体がオリンピックの競技種目ではなくなってしまったことであろう。米国のラグビーはその強さを誇示するための世界的な檜舞台を失ってしまったのである。

(4) クリケットの衰退に学ぶ教訓

前項で紹介したいずれの仮説にも関係する、有力な傍証がある。それは、同じ米国内でかつて人気のあった別のスポーツも、ラグビーと似たような運命を辿っていたという事実である。そのスポーツとは、ラグビーと同じく英国発祥のクリケットである。

クリケットが米国に伝わった確実な時期については未だ定かではないものの、ウィリアム・バイアド二世(1712)^{xxx}はその日記 *The Secret Diaries of William Byrd of Westover* に、1709年4月にバージニア州でクリケットの試合を行ったことを記しており、これが米国におけるクリケットの最古の記録とされる。クリケットの専門家である Das (年代不明)^{xxxi}によれば、その後、米国にはエリート階級を中心とした多くのクリケットクラブが誕生し、その中にはハーバードやイエールと同じアイビーリーグの

1校であるダートマス大学も含まれている^{xxxii}。

1844年、ニューヨーク・マンハッタンにおいて、米国とカナダとのクリケット試合が開催されている。1万人もの観客を集め双方の国で大きく報道されたというこの試合が^{xxxiii}、米国初の国際試合である。1880年代には米国代表チームによる世界ツアーも実施された。

しかし結果として、「19世紀イギリスの『国民的娯楽』として知られるクリケットは、アメリカ社会ではそれほどには流行らなかった」のである^{xxxiv}。その理由として上記の Das は、当時の米国が世界の潮流に乗り遅れたこと、そして野球というライバルが現れたことを挙げる。

米国が世界ツアーを行った1880年代、クリケットの本場英国やオーストラリアでは、既にプロ化への動きが始まっていた。それに比して、米国はまだ学生などのアマチュアが中心であり、そもそも米国のクリケットとは、当時から親和性が高いとされたエリート支配階級のみを中心とするクラス限定的なスポーツであった。世界との実力差は開いた。

他方、国内のクリケットには強力なライバルが現れる。野球である。野球の起源は諸説あり、例えば Das はクリケットから派生したタウンボール (townball) という競技からさらに派生したものという^{xxxv}。他方、スミスはラウンダーズ (rounders) と呼ばれる英国の子供の遊びから枝分かれしたものと記している^{xxxvi}。いずれにしろ、クリケットと野球にはボールとバットが使われるなど見た目の共通点があることから、両者に何らかの関係があったことは疑いない。

米国のクリケットがエリート限定のスポーツとして停滞するのを尻目に、野球はより幅広い大衆の支持を獲得するため様々な改革を実現する。例えば、クリケットで用いられた平面バットを、野球ではより量産が容易な円柱型へと改良した^{xxxvii}。そして、1876年^{xxxviii}にはついにプロリーグが誕生する。この時点で勝負はついた。

ほぼ同じ時代の米国で起こった二つの似た出来事、すなわち、ラグビー及びクリケットの衰退、そしてアメリカンフットボールと野球の勃興から、今我々が学べる教訓は何だろうか。本稿の最後にそれを考えてみたい。

まず、米国で成功したスポーツであるアメリカンフットボールも野球も、英国から伝わった類似の競技を原型に、米国人好みに、なおかつその時代に合った創意工夫を重ね改良したものだということである。

第二に、米国で衰退したスポーツは、ラグビーもクリケットも、文脈は違えど、等しくプロ化の流れを読み切れなかったということである。そしてこのことは、1995年、オールブラックスに145失点で敗戦した日本のラグビーにもひとつの示唆を与えている。すなわち、145点で負けたことはあくまで結果であって、それをもたらしたより重要な根本原因は、プロ化という当時の世界の流れに、日本が乗り遅れたからではないか、ということである。

(5) 新たな仮説と物語的理解

これまで見て来たように、ラグビーがアメリカンフットボールに取って代わられた理由として、現在米国で流布している三つの仮説はいずれもそれ単独では十分な説明となっていない。おそらく、それぞれが相互に、そして複合的に作用し合い、現在のような状況を作り上げたのだと理解する。

ここで一点だけ、重要な指摘をしておきたい。ラグビーからアメリカンフットボールへの変化について、上記のスミスは「進化」と呼び、同じく川口は「発展」と言う。確かに、アメリカンフットボールの立場から見ればそのような理解の仕方は可能かもしれない。けれども、そうした呼称はあたかもラグビーがスポーツとして劣位にあるかのような印象を抱かせ、もう一方の当事者であるラグビーの関係者にとっては余り愉快な話ではないだろう。

1890年代における本場英国のラグビー事情を紹介したCollins(1998)^{xxxix}によれば、当時、ラグビーの試合で何か揉め事があれば、レフリーではなく両チームのキャプテンの話し合いで解決していたという。未整備なルールに乗じて、試合中の暴力も多発していたという。

このことから判断するに、本場英国でさえ、当時用いられていたラグビーのルールは現在に比べればかなり曖昧だったのだ。そしてそのこ

とは、本場英国のラグビー自体も原初的な形態から近代的なそれへと大きな発展を遂げて来たことを示している。言葉を変えれば、産声をあげたばかりのラグビーは、それだけ可塑性が高かったということだろう。

すなわち、スミスや川口の言うようにラグビーがアメリカンフットボールへと進化・発展したのではなく、まだルールが未整備だった黎明期のラグビーが本国英国では近代ラグビーへ、そして米国ではアメリカンフットボールへと、それぞれの文化に応じた独自の発展を遂げたというのがより中立的で正しい表現なのではないかというのが筆者の訴えである。

これまでの結論を整理し、物語風にまとめてみよう。1823年、英国のエリス少年がボールを抱えて走り出したというラグビー誕生の瞬間から約50年後、その新しいスポーツはカナダを経由して米国に伝わった。米国人はそれを大層気に入ったものの、規則がまだ未整備であったため、米国の文化的風土に合うような改良が施され、やがてアメリカンフットボールへと独自の進化を遂げた。

原初的なラグビーと新しいスポーツであるアメリカンフットボールはそれぞれに人気を博し、米国内でしばらくの間併存する。しかし20世紀初頭、両競技に困難が訪れる。ラグビーは強豪国に連敗し、ファンに大いなる失望をもたらすのだ。他方、アメリカンフットボールはその暴力性と危険性が顕著となり、社会的な抵抗に直面する。

やがて、両競技とも困難を乗り越え、ラグビーはオリンピックに出場、金メダルを獲得し、再び国内の人気を獲得する。また、アメリカンフットボールには待望のプロリーグが誕生し、大学出身のスター選手が大活躍する。

けれども1920年代半ばに至り、二つの競技はついに明暗を分ける。前方へのパスが認められるなど、米国人好みにさらに改良されたアメリカンフットボールは、大学、プロ共に益々多くのファンを獲得した一方で、ラグビーは1924年以降オリンピックの競技種目から消え、選手の活躍の場が閉ざされた。当然、人気はジリ貧となる。

他方、ラグビー発祥の地である英国でも、未整備だった規則は徐々に修正／改良された。前方へのパスを認めたアメリカンフットボールほどの根本的な変更こそなかったものの、長い時間をかけ、21世紀の今も世界中で愛好される近代的なスポーツへと発展した。以上がラグビーとアメリカンフットボールを巡る筆者なりの物語である。

(6) 米国におけるラグビーとアメリカンフットボールの競技人口統計

本章を締め括る前に、ラグビーとアメリカンフットボールの人気に現状でどれほどの差が生まれているか、客観的な統計で見ておこう。

まず、米国におけるラグビーの競技人口について、大西(2017)^{xi}は2種類の数値を紹介している。ひとつはラグビー競技の国際統括団体である World Rugby (WR) がその公式統計で用いている 116,532 人という数値である(2015年)。これは米ラグビー協会へ正式に登録した競技者の数であり、いわば検証可能かつ、より確実な数値である。

もうひとつは、米ラグビー協会が民間の調査会社を使って調べさせた協会未登録の競技者も含めた推計値 149 万人である。WR は上の 116,532 人という数値と共にこの 149 万人という数値も 2015 年の年次報告書で同時に用いている。

他方、アメリカンフットボールについては Statista (2017)^{xli}による半期ごとの統計がある。2017 年春の段階で、過去 1 年間にアメリカンフットボールをプレーしたことのある米国人は実に 1,709 万人もいる。統計を取り始めた 2011 年秋時点の 1,871 万人よりはわずかに減少しているものの、それでもラグビー競技者推計値の 11 倍以上という圧倒的な数値である。

因みに、観戦者の数については公式の全体統計がない。例えば、上の大西は米国におけるラグビーのプロ競技が発足したことを紹介しているが、チーム数も少なく、テレビ放映の頻度も少なかったため、チームによっては経営的に立ち行かなくなったことを併せて報告している。

その一方、アメリカンフットボールはプロ、アマ問わず、シーズン開始と共に NBC テレビな

ど三大ネットワークさえもが毎週競うように中継する。先に紹介した映画『かけひきは、恋のはじまり』が描いた 1920 年代のプロリーグは、当時の大学チームの人気にまだ劣っていたが、現在では多くのプロチームが各地で巨大なビジネスを展開している。例えば、プロチーム全米一を決める毎年 of スーパーボウルでは 10 万人がスタジアムに押し掛け、1 億人を超える視聴者がテレビで観戦するという^{xlii}。もはや精緻な数値を用いて比較する必要性も感じられないほど、米国における人気という点で、ラグビーとアメリカンフットボールの差は大きく開いてしまったのである。

5、今後の研究課題

ラグビー博士として知られる小林(2003)^{xliii}には『世界ラグビー基礎知識』という著書がある。同書では 21 世紀初頭のラグビー事情が、英豪仏などの強豪国を中心に詳しく紹介されている一方、米国については代表チームのイーグルスと西海岸のチームについて短く触れられているのみである。頁数で言えば、全体の 242 頁に比して米国のラグビー事情に割かれたのはわずか 3 頁に過ぎない。

確かに、現状の米国はラグビーの強豪国とまでは言えないだろう。これまで、ワールドカップにこそ 7 度出場しているものの、予選リーグを突破したことは 1 度もない。けれども、だからと言って米国のラグビー事情について何も知らなくて良いとは筆者は思わない。

何故なら、市場としての魅力という点で、米国は中国などと並びこれからの開拓が期待される国の筆頭であろう。しかも、米国の市場は中国とは比較にならないほど既に成熟している。この点はまずもって誰もが認めざるを得ないだろう。

そのような国であれば、将来、ワールドカップの開催地として名乗りを上げる可能性は高い。実際、2018 年夏には同国サンフランシスコにおいて 7 人制のワールドカップが開催される。

加えて、米国は既にサッカーの (FIFA) ワールドカップを開催した経験がある。多くの国で

人気のあるサッカーも、米国では比較的マイナーなスポーツであり、首都ワシントン DC など 9 都市でワールドカップが開催された 1994 年夏の段階では、ラグビー同様、今以上に人気のないスポーツであった。

しかしそれでも、ワールドカップ開催は可能だったのである。同じマイナースポーツのサッカーで出来て、ラグビーで出来ないということはないのではないか。大西 (2016) ^{xliv} の指摘する通り、原則として複数都市での実施となる FIFA ワールドカップの開催経験は、同様の性格を持つ将来のラグビーワールドカップにも必ず役立っだろう。

以上のような点から、米国のラグビーについては今以上に多くの注意が払われるべきではないかと筆者は考える。大西 (2017) が指摘する通り、「米国における 7 人制ラグビーの現状、高校生以下のラグビー事情など」の研究は現在もまだ手つかずであり、同国の女子ラグビーの発展にも日本として学ぶべき点は多々ある。今後の課題は山積していると言って良い。

そのような中、ひとつの明るいニュースは、2018 年 3 月、わが国の明治大学ラグビー部が米国のイエール大学を招いて親善試合を行うことである。サンケイスポーツ (2018) はこの試合について、これまでの大学の交流試合は英国のオックスフォード大やケンブリッジ大とが中心だったと前置きし、「異例」という単語を用いて米国の名門大学とわが国の強豪チームとの交流戦実現を好意的に評価している ^{xlv}。残念ながら本稿の執筆時点では両者の対戦結果について触れることが出来ないが、今後こうした動きが広がって行けば、日本国内での米国のラグビーに関する理解は大いに促進されよう。

本稿執筆に当たっては、資料の少ない中、オンラインのまとめサイトである Wikipedia (主として英語版) の記述も適宜参考にした。但し、同サイトはあくまでも二次、三次の情報源なので正確を期すことを目的に、可能な限り原典を参照するようにしたことは断っておきたい。

- i R. A. スミス (2001) 『カレッジスポーツの誕生』 (白石義郎・岩田弘三監訳)、p51., 玉川大学出版部
- ii 1858 年創立とされるが、正式な大学令下ではその後 1877 年創立の東京帝国大学が最古
- iii 慶應は 1901 年、横浜の外国人チームと戦った
- iv 前掲書 p38.
- v 前掲書 p44.
- vi 前掲書 p39.
- vii 前掲書 p48.
- viii 前掲書 p51.
- ix 前掲書 p52.
- x 前掲書 p56.
- xi 前掲書 p63.
- xii 2018 年 5 月筆者撮影
- xiii 前掲書 p47.
- xiv 前掲書 p56.
- xv 前掲書 p56.
- xvi 川口智久 (1977) 「ラグビーからアメリカンフットボールへの発展: スクラムをめぐる問題」『一橋論叢』77 (1) ., pp. 108-114., 一橋大学
- xvii The Professional Football Researchers Association (年代不明) “Camp and his Followers: American Football 1876-1889” (http://www.profootballresearchers.com/articles/Camp_And_Followers.pdf) 2018 年 1 月 28 日
- xviii スミス前掲書 p68.
- xix スミス前掲書 p71.
- xx 川口前掲論文 p109.
- xxi スミスはこれを「ブロックゲーム」と呼んでいる。スミス前掲書 pp. 69-70.
- xxii スミス前掲書 p71.
- xxiii 例えば、西村克美・星野繁一・高木應光 (2016) 「『ラグビーの精神・歴史・伝統の理解』についての一考察」『ラグビーフォーラム』No. 9., pp. 65-71., 日本ラグビー学会
- xxiv p77.
- xxv 種子田穰 (2002) 『史上最も成功したスポーツビジネス』pp. 51-58., 毎日新聞社
- xxvi 1900 年、1908 年、1920 年、1924 年
- xxvii 1920 年のアントワープ大会と 1924 年のパリ大会

- xxviii Huw Richards (2013) “The tour that killed American rugby,” *ESPN scrum*
(<http://www.espnscrum.com/newzealand/rugby/story/204045.html>) 2018 年 1 月 28 日
- xxix 読売新聞 (2018) 「名キッカー 運営トライ：元代表広瀬氏 経験、人脈生かす」1 月 25 日
- xxx Dreamcricket.com (2007) “History of American Cricket Part I-the 1700’s,” *ESPN*
(<http://www.dreamcricket.com/articles/history-of-american-cricket/history-of-american-cricket-part-i--the-1700s/>) 2018 年 1 月 31 日
- xxxi Deb K. Das (年代不明) “A brief history: Cricket in USA,” *ESPN*
(<http://www.espncriinfo.com/usa/content/story/141158.html>) 2018 年 1 月 28 日
- xxxii クラブ創設は 18 世紀後半
- xxxiii Wikipedia などでは 2 万人と記載されているが、誤記であろう
- xxxiv スミス前掲書 p16.
- xxxv Das 前掲サイト
- xxxvi スミス前掲書 p17.
- xxxvii Das 前掲サイト
- xxxviii ナショナルリーグが先。朝日新聞社 (2007) 『知恵蔵』「メジャーリーグ」の項より
- xxxix Tony Collins (1998) *Rugby’s Great Split: Class, Culture and the Origins of Rugby League Football*, p15., Frank Cass Publishers, UK
- xl 大西好宣 (2017) 「アメリカのラグビーを考えるために：研究のための序章」『ラグビーフォーラム』No.10., pp.35-44., 日本ラグビー学会
- xli Statista (2017) “Number of people who played football within the last 12 months in the United States from autumn 2011 to spring 2017,” Statista
(<https://www.statista.com/statistics/352130/number-of-football-players-usa/>)
2018 年 1 月 23 日
- xlii MSN 産経ニュース (2014) 「1 億 1150 万人がテレビ観戦 米国内最多記録に」2 月 4 日
- xliii 小林深緑郎 (2003) 『世界ラグビー基礎知識』ベースボールマガジン社
- xliv 大西好宣 (2016) 「ラグビーワールドカップを非英語圏で開催するということ-開催都市の受け入れ環境を考える-」『ラグビーフォーラム』No.9., pp.25-36., 日本ラグビー学会
- xlv サンケイスポーツ (2018) 「明大、豪・シドニー大&米・イエール大と異例の国際交流試合」(<http://www.sanspo.com/rugby/news/20180123/uni18012305010001-n1.html>) 1 月 23 日